

離乳期の食事に対する母親の態度・行動、食生活リテラシーは 児の「食べる力」に関連するか？

佐藤真里子¹⁾、吉池信男¹⁾

1) 青森県立保健大学健康科学研究科

Key Words ①母親の態度・行動 ②離乳期の食事 ③食生活リテラシー ④食べる力

I. はじめに

離乳期の食事では、「いつ、何を、どれだけ食べるか」ということに加えて、「どのように食べるか」という視点も重要である。しかし、離乳期の児が「どのように食べるか」ということに対する、母親の態度や行動についての研究は十分ではない。一方、国外では、離乳期の児の食べ方、母親の育児スタイル、態度・行動についての研究が進み、国などから具体的な推奨も示されている。また、ヘルスリテラシー、特に食生活リテラシー（以下HEL）は、母親の児の食事に対する態度や行動に影響する可能性があるが、わが国の先行研究では限定的な検討に留まっている。そこで本研究では、①離乳期における児の食事に関わる母親の態度・行動（以下、母親の態度・行動）について実態を記述し、②母親のHEL及び③「児の自ら進んで食べる力」との関係性（図1）を明らかにすることを目的とする。

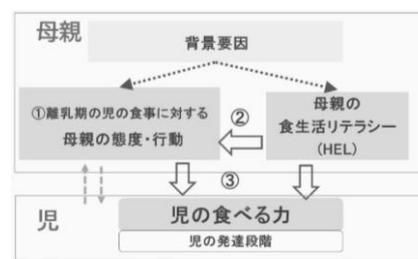


図1. 本研究のフレーム

II. 研究方法と対象

1. 研究デザイン：横断研究
2. セッティング・対象、倫理的配慮：対象者は、モニター管理会社が保有する全国のモニター登録会員であり、登録情報に基づき 20～49 歳女性、7,600 人を一次標本とした。スクリーニング調査により、① 1 歳 0 か月～1 歳 6 か月の子どもがいる、② 子どもが食べることや飲み込む機能に問題がない、③ 食物アレルギー等の食べ物の制限がないことを確認し、さらに本研究の同意を得られた者を二次標本とした。目標とする標本の大きさを 300 とし、それに達した時点で調査を打ち切った。インターネット調査会社に委託し、2022 年 9 月に実施した。青森県立保健大学倫理委員会の承認（No.22015）の後、調査を実施した。
3. 調査項目：基本属性（教育歴、経済的ゆとり感などを含む）、児の身体状況等（9 問）、母親の態度・行動（11 問；5 件法）、高泉らの HEL 尺度（5 問；5 件法）、児の食べる力（「現在お子さんは自ら進んで食べていますか」）（1 問；5 件法）の 26 項目である。母親の態度・行動に関する設問は、わが国の授乳・離乳の支援ガイド、国外の推奨事項、既存の評価指標、並びに質的研究の内容等、国内外で先行して示されている概念を踏まえ作成し、離乳食開始から調査時点に至るまでの期間に実際に行っていた行動について尋ねた。児の「食べる力」は、楽しく食べるこどもに～食から始まる健やかガイド（2004 年）における、離乳期に育てたい食べる力である「見て、触って、自分で進んで食べようとする」という推奨を元に作成し、調査時点での児の状況について尋ねた。
4. 統計解析：有意水準は $p=0.05$ （両側検定）とし、以下の解析を実施した。目的①の母親の態度・行動の実態の記述には探索的因子分析を実施した。目的②に対しては、①で抽出された因子を元に各個人の因子得点を算出し、母親の態度・行動の 2 つの因子に対する

因子得点と母親の HEL の合計得点 (5-25 点) を用いて Spearman の順位相関係数を求めた。目的③に対しては、児の食べる力 (高・低 2 群) を従属変数、母親の態度・行動に関する因子と母親の HEL (低・中・高 3 群) を独立変数としたロジスティック回帰分析を用いた。単変量解析の後、交絡因子として考えられる因子を共変量としてモデルに加えた。

III. 結果

1. 対象者の属性

解析対象者 (n=300) の年齢は中央値 33 歳 [レンジ: 21~46 歳]、母親の学歴は大学卒以上が 53%、出生順位は第一子 58%、第二子以降 42%であった。

2. 離乳期の児の食事に対する母親の態度・行動の実態の記述

因子分析の結果、2 因子が抽出され 11 項目中 9 項目が残った。第 1 因子は「子どもの食べたいまたは食べたくないという反応に気を配っていた」「子どもが手でつかんで食べることのできる食事を与えていた」等の 6 項目で、国内外の推奨事項を含む項目の因子負荷量が高かった。第 2 因子は、「子どもと過ごす食事の時間にテレビやスマートフォンに夢中になっていた」「子どもが食事以外で時間に関係なく甘い飲み物を飲むことを許していた」等の 3 項目で、国外で推奨されてない項目の因子負荷量が高かった。第 1 因子を「体験させる、反応に応える」、第 2 因子を「時間に縛られず、放任傾向」と命名した。

3. 離乳期の児の食事に対する母親の態度・行動と母親の HEL との関係

「体験させる、反応に応える」と HEL 得点では中等度の正の相関がみられた ($r=0.40, p<0.01$)。「時間に縛られず、放任傾向」と HEL 得点では有意な相関はなかった。

4. 母親の態度・行動及び母親の HEL と児の食べる力との関連

児の月齢、出生順位、就労状況を調整したロジスティック回帰分析において、「体験させる、反応に応える」の中群 (OR=2.92, 95%CI 1.42-6.17) 及び高群 (OR=4.12, 同 2.06-11.14)、母親の HEL の中群 (OR=3.03, 同 1.57-6.02) 及び高群 (OR=3.31, 同 1.50-7.60) において、児の食べる力の高さと有意な関連が認められた。

IV. 考察

離乳期の児の食事に対する母親の態度・行動には「体験させる、反応に応える」と「時間に縛られず、放任傾向」2 つの重要なスタイルがあることがわかった。国外では、支配的、自由放任主義、反応的、食べることへの圧力等様々な用語を用いて表現されているが、わが国ではこれらのような態度・行動の実態の記述をした研究はなく、新たな概念を導き出すことができた。さらに、母親が「体験させる、反応に応える」という態度・行動をより多く実践し、母親の HEL が高いほど、児の食べる力が高いことに関連があることがわかった。先行研究では、母親の反応的な行動と乳児のエネルギー摂取量には望ましい正の関連や、食品多様性スコアが高い幼児の保護者では一緒に食事をすることに気を付けていることが明らかになっている。

以上より、「体験させる、反応に応える」を実践する母親は食べるものに対しても注意を向けている可能性が示唆された。また、今後、HEL 向上を目的とし、妊娠期等の早期からの情報提供や教育介入プログラムの開発とその検証も必要と考えられた。

ⁱ 研究代表者連絡先: 〒030 8505 青森県青森市大字浜館字間瀬 58-1 2181003@ms.auhw.ac.jp